

九条武子と『源氏物語』 小林賢太

「心の花」一五〇〇号記念号（十月号）の特集「歌と風景」では、九条武子の歌を担当させていただいた。執筆のために武子の歌集に目を通した際、次のような歌に興味を持った。

・舟はみな烏帽子のさまにぬびぬ春の入江の青柳のもと

（『薰染』）

・やごとなき糸毛の車しらねども朱雀大路を今もゆく秋（同）

・祭近み藤の垂房花みちぬ直衣の君のたづね来ん宿（『白孔雀』）

公家装束や牛車を詠んでおり、武子が王朝文化に心を寄せていたことが伺える。中でも『源氏物語』に惹かれていたことが次の歌から分かる。以下、出典を記さない歌は『金鈴』による。

・しきたへの枕の下に歌しければ源氏の君にまみえむ夜かな

・須磨明石源氏絵巻の小屏風に夢まもらせてやはらかに寝る

武子にとって『源氏物語』は暮らしを彩る文芸であり、光源氏は夢の中の貴公子だったのかもしれない。彼女は去風流の花を嗜んでいたが、大正八年に主催した花の会では『源氏物語』五十四帖を主題としており、ここから源氏への愛着が見て取れる。

『源氏物語』には多くの女性が描かれるが、次に掲げる歌からは、武子がある人物に心惹かれていたことが推察される。

・宇治川の瀬の音ききつつなげきむ大ひめ君に似たる宿世か
・そのかみの大姫君もわがときうれへにひたりながめし夕日

・よひやみにきえし蛸と世を去りし大姫君のこひしきゆふべ

（「心の花」大正十年八月号）

大姫君とは「宇治十帖」に登場する宇治の大君のこと。大君は宇治の八宮の長女で、二十五歳で敬愛する父に先立たれる。後見の貴公子・薫に心惹かれたつも、妹の幸せを願い、自分の代わりに妹と薫を結婚させようとする。だがその計画はうまくいかず、さらに様々な愁事も重なり、心労のあまり二十六歳で世を去った。武子はずいぶん、幸福とは言い難い大君の運命に自らの宿命を重ねたのだろう。想像に過ぎないが、ひとつは尊敬する父に先立たれた境遇があったのではないだろうか。武子は父・大谷光尊を敬愛し、光尊もまた武子を鍾愛した。その父は武子が十七歳の時に亡くなる。次の歌からは彼女の父恋しさが伝わってくる。

・歌よめとをしへられつる九つの父がみまへのわれの恋しさ

またひとつには、成就しなかった恋が関係するかもしれない。

武子には夫・良致と結婚する前における男性との縁談話があり、その人と二人きりで面会する機会もあったらしい（籠谷眞智子『九条武子―その生涯のあしあと』同朋舎、一九八八年）。だが事情により彼との結婚は実現しなかった。相手を慕いながらもその人と結ばれなかった運命は、大君と重なり合う。真相は不明だが、武子が大君に心を寄せていたことは確かである。大君ほどではなかったが、昭和三年、武子は四十二歳の若さで世を去った。

ところで、今年のNHK大河ドラマの主役は、『源氏物語』を書いた紫式部である。放送が楽しみだが、今後は時折、紫式部と歌との関わりについても考えを巡らせてみたい。